

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 4 月 1 日現在

機関番号：34419

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011～2012

課題番号：23720298

研究課題名（和文）小学校における日本人英語指導者対象の研修内容の効果に関する実証的研究

研究課題名（英文）An Empirical Study on Effective Training Sessions for Elementary School English Teachers

研究代表者

松永 舞（MATSUNAGA MAI）

近畿大学・経済学部・准教授

研究者番号：30351571

研究成果の概要（和文）：小学校教員の英語活動における指導力、英語力を高めるための研修内容を実証的データに基づき提案した。具体的には教職課程の大学生を対象としてゲーム活動を英語で進める指導力育成と教室英語使用の英語力育成に関する実験を行った。実験結果から、ゲーム活動に関しては、指導者が小学校教員に適切なモデルを提示する方法が効果的であることが分かった。また、教室英語に関しては暗記した教室英語を実践練習で応用する方法が教員に自信をつける意味でも効果的であることが分かった。これらの結果はこれまで指導者の勘や経験に頼って行ってきた研修方法と必ずしも一致しないことから、今後も実証的データに裏付けられた効果的な研修内容・方法を追及していくことの重要性を示唆している。

研究成果の概要（英文）：This study explored effective training procedures for elementary school English teachers on giving game instructions in English, and using classroom English. The results of statistical analyses implied that trainers offering proper demonstrations was effective in improving elementary school teachers' game instruction skills. In terms of classroom English, teachers actually using classroom English in mock teaching situations was important to improve their ability and confidence in using classroom English. These results suggest that an empirical study of this kind, not groundless ideas based only on trainers' experience or intuition, will contribute to developing a more effective teacher training system for elementary school English education.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
交付決定額	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：小学校英語活動、教員研修

1. 研究開始当初の背景

2011 年度より小学校 5・6 年生の週 1 回の英語活動が必修化し、主な指導者は学級担任となった。この必修化をふまえてこれまで都道府県レベルの研修等、様々な教員研修が行われてきた。

文部科学省は、独立行政法人教員研修センタ

ー主催の中央研修（2007 年～）、各都道府県教育委員会を中心とした中核教員研修（2008 年～）、各小学校で行われる校内研修（2008 年～）という 3 段階の伝達講習という形で教員研修を実施した（独立行政法人教員研修センター（2009）『‘09 つくば研修ガイド』他）。第一段階の中央研修は全国を 5 ブロックに分け、指導主事等を対象に小学校外国語活動

の理論的・実践的側面に関する研修を5日間（2009年は3日間）実施した。中央研修に続き、第二段階として指導主事等が各地域で中核教員研修を実施した。中核教員研修は地域内の各小学校で英語活動を推進する中核者（教員）を育成することが目的であり、5日間にわたる研修では各小学校の代表者（中核者）を対象に『小学校外国語活動研修ガイドブック』（文部科学省、2009）の内容等、英語活動の知識と実践に関する研修が行われた（同ガイドブック）。最終段階として中核教員が各小学校で2008年、2009年の2年間に合計30時間の校内研修を行うとされた。校内研修で中核教員が果たす役割として、各校の英語活動のカリキュラムと指導方法を決定し他の教員の要望を取り入れた英語力・指導力向上のための研修を行うこと、そして他の教員のモデルとなるような指導力を中核教員自身が実践することの2点があげられていた（同ガイドブック）。

この3段階の研修システムの他にも各地域の教育委員会主催の小学校教員全般を対象にした研修等も行われていたが、2011年度の必修化に向けて学級担任の英語力および指導力の準備は万全とは言い難いのが現状であった。また、研修によって得られる効果を評価する具体的な検証は行われていなかった。そこでこの研究は、小学校英語指導者（主に学級担任）にとって実証的裏付けのある効果的な研修内容と方法を提示することを最終目的とした。

2. 研究の目的

本研究は小学校教員の指導力・英語力を向上させるためのより効果的な研修内容を追及することを目的とした。具体的には、先行研究で提案された研修内容のうち、指導力・英語力に関する頻度の高い研修項目を2つ取り上げ、それぞれをどのような方法でどの程度の練習時間を割けば被験者の能力向上に結びつくかを検証し、実証的データに裏付けされた効果的な研修内容を作成した。取りあげる項目は1年目は「ゲームの指導法（英語による指導力）」、2年目は「教室英語習得（英語力）」とした。

これら2項目に関して、教職課程（英語）科目「英語科教育法Ⅰ」を履修する大学生を被験者として2グループに分け、実施方法と実施時間の差による2グループ間の英語による指導力・英語力向上の差を測定した。測定の際に用いるテストおよび指導力・英語力の指標は、研究者が2010年3月に取得した博士号（学術：神戸大学）の研究（博士論文タイトル：Developing a Diagnostic Test for Measuring Competencies of Japanese

English Teachers in Elementary Schools 日本人小学校英語指導者の資質診断テスト開発）の際作成したインタビュー形式のテストおよび「小学校英語教員に求められる指導力・英語力の指標（レベル1（低）～4（高）、レベル3が求められるレベル）」をベースとして改訂した。本研究期間2年間では研修内容のうち上記2項目に焦点をあて、そこから導き出せるより望ましい効果的な研修内容と方法を提案した。また、本研究期間後も引き続き他の研修項目に関する研究を進め、最終的には都道府県教育委員会や民間レベルで行われる研修内容全体のモデル案を作成することを視野に入れていた。

3. 研究の方法

本研究は2年間で、研究者と研究協力者の担当する英語教職課程科目「英語科教育法Ⅰ」2クラスの受講生を被験者とし、授業内容に小学校英語活動のための研修内容として頻繁に用いられる英語による指導力（ゲームの指導方法）および英語力（教室英語習得）の練習を組み込んだ。その際、2グループに分けて練習時間や方法に差をつけ、練習後の英語による指導力および英語力の定着度合いの差を測定した。

（1）被験者

被験者は研究者および研究協力者が担当する教職必修科目「英語科教育法Ⅰ」2クラス（前期開講）を受講する大学生2～4年生である。これまでの実績から1クラスの受講生は20人前後であると予想された。2クラスのうち研究協力者担当クラスを1グループ、研究者担当クラスをもう1グループとし、小学校英語活動のための研修で頻繁に用いられる2項目の練習を授業内容に組み込み、練習時間や方法の差による定着度の違いをインタビュー形式のテストを用いて測定した。

（2）材料

①インタビューテスト

練習の成果を測定するために、各グループの授業担当者（研究者と研究協力者）が授業時間外にインタビュー形式のプリテストとポストテストを実施した。インタビューテストは被験者と担当者が1対1で10分程度行い、採点目的のため被験者の許可を得て録画した。この形式は2項目（2年間）に共通であった。

ゲームの指導法に関してのプリテスト・ポストテストでは同じ2種類のゲームを用い、被験者が児童に（担当者を児童に見立てて）ゲームの指示が英語で的確にできるかを測定した。教室英語習得に関しては、同じプリテスト・ポストテストで被験者が場面に応じて

教室英語を児童あるいはALT(担当者を相手に)に的確に使えるかを測定した。

②評価に用いる指標

「ゲームの指導方法」、「教室英語」の評価は、研究者が博士論文執筆時に作成した指導力・スピーキング力指標をそれぞれ用いて行った。両指標とも以下の4レベルからなり、指導力(100%)は①課題の達成度(70%)、②児童のレベル把握(10%)、③指導言語(10%)、④流暢さ(10%)の4観点から、英語スピーキング力(100%)は①総合力(50%)、②語彙力(10%)、③文法力(10%)、④流暢さ(10%)、⑤一貫性(10%)、⑥発音(10%)の6観点から評価する。なお、両指標の妥当性は博士論文で検証済みである。

＜この研究における4レベル＞

レベル4：必要なレベルに十分達している(80%以上)

レベル3：最低限度必要なレベルに達している(70%以上) ←合格レベル

レベル2：必要なレベルに達していない(60%以上)

レベル1：測定するレベルに達していない(59%以下)

③ 練習教材

ゲームの指導方法の練習は、『英語ノート1・2』(文部科学省、2009)から頻度の高い5種類のゲームを選び、1回の授業で1種類のゲームの指導方法を30分間練習した。教室英語の練習は、『教室英語ガイド』(Gardner & Gardner 日本語版、旺文社、2005)の教室英語リストから約200表現(9セット)を選び、1回の授業で20表現程度(1セット)を15分間練習した。

(3) 実施方法

上記2項目に関し、2グループ間で練習回数に差をつけた実験、練習方法に差をつけた実験等を行った。練習方法の差については以下の通りである。

① ゲームの指導方法

Aグループ(研究協力者)は指導者がゲームの指導方法を実演し、被験者は児童役として参加することを通して指導方法を学ぶ。Bグループ(研究者)は被験者自身が、小グループで先生役として実際にゲーム活動を進める。ただし指導者による実演はない。両グループとも練習の際、指導者が作成した共通のワークシートを参照した。ワークシートにはゲームの目的、内容、実施方法(日本語による指示の流れも含む)など練習内容の概要が書かれていた。

② 教室英語習得

Aグループ(研究者)は暗記してきた教室英語(1セット、約20表現)を指導者が発話する日本語訳に対応して英語で答える反復練習を2回行う。その際、正しい発音、イントネーション、ジェスチャー等にも注意する。Bグループ(研究協力者)は暗記してきたAグループと同じ教室英語を用いて、小グループで先生役として授業を行う。授業のシナリオは指導者がワークシートとして準備する。実際に授業する際、正しい発音、イントネーション、ジェスチャー等にも注意するよう促される。

4. 研究成果

研究者はこれまで行われてきた多くの研修項目自体には同意するものの、それらの実施方法や時間配分等の効果が検証されておらず、いわば主催者の経験に基づいた“勘”で行われる研修体制に疑問を感じた。限られた研修時間を有効に使うことは参加者の英語力・指導力向上に不可欠であり、研修項目の実施方法や時間に関する実証的研究は今後の研修内容の改善に必要であると考えた。

本研究では練習回数が多い方が望ましいという当然の結果だけでなく、たとえ数回の練習であってもある程度の効果(点数の有意な伸び)があることも分かり、教職科目の一部に実践練習をたとえ少しでも組み込む効果と重要性を示唆した。

またゲーム活動に関しては、指導者が教員(被験者)にモデルとなる指導方法を実演提示すること(Aグループの方法)が特に経験の浅い教員にとって効果的な研修方法の一つであることが分かった。このことはモデルとなる指導者自身の指導力の重要性も示唆している。

教室英語習得に関しては、暗記した教室英語を教員(被験者)が実際に使って指導練習する場を設けること(Bグループの方法)が重要であることが明らかになった。このことは実践練習の重要性を示唆している。さらに、Bグループの方法で教室英語を習得した被験者は、教室英語を反復練習した被験者(Aグループ)に比べて教室英語使用に対する自信がよりついたこともアンケート調査結果から明らかになった。

さらに、ゲームの指導方法および教室英語習得の両項目において、英語力の差(TOEICスコアの差)がインタビューテストの点数に差をつけない(影響を与えない)ことが分かった。このことは英語力が低い被験者でも練習(研修)を通してある程度の指導力、英語

力がつくことを示唆しており、実践練習（研修）の重要性を改めて意識させる結果である。これらの結果は今まで勘に基づいて行われてきた研修方法と必ずしも一致しないことから、いかに実証的研究が重要であることを示している。

このような研修内容に関する実証的研究はこれまで類を見ず、研究結果をもとに実証的データに裏付けされた効果的な研修内容と方法を提示することは、小学校英語活動指導者の資質向上、そして最終的には児童の学習効果に貢献するものと考ええる。

今後はより質の高い小学校英語教員を育成するため、その他の研修項目（例：歌とチャント等）に関する実証的研究を行っていくことが必要である。また研修のみでは時間に限りがあるため、研修外での教員自身の自己研修の必要性・重要性にも着目し、効果的な自己研修の内容・方法なども今後合わせて検討する必要があると思われる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

(1) Mai, Matsunaga. (2012). How does English proficiency affect English teaching skills of pre-service elementary school teachers? *近畿大学 生駒経済論叢*, 第10巻第2号, 31-45. 査読無

(2) Mai, Matsunaga. (2012). English training sessions for pre-service elementary school teachers in Japan. *Selected papers from the twenty-first international symposium on English teaching. ETA-ROC (English Teachers' Association Republic of China)*, 115-127. 査読有

(3) Mai, Matsunaga. (2012). Practical training sessions to prepare pre-service teachers to conduct English activities at the elementary school level. *近畿大学教養・外国語教育センター紀要（外国語編）*, 第2巻第2号, 211-231. 査読有

(4) Mai, Matsunaga. (2012). An empirical study on effective training sessions for pre-service elementary school teachers. *JACET 関西紀要*, 第14号, 29-40. 査読有

〔学会発表〕（計3件）

(1) Mai, Matsunaga. (2012. 11. 11.). English

training sessions for pre-service elementary school teachers in Japan. The twenty-first international symposium on English teaching. ETA-ROC (English Teachers' Association Republic of China), Taipei, Taiwan

(2) Mai, Matsunaga. (2012. 8. 4.). Practical training sessions to prepare pre-service teachers to conduct English activities in elementary schools. 全国英語教育学会 第38回全国大会（愛知研究大会）

(3) Mai, Matsunaga. (2011. 7. 17.) How does English proficiency affect English teaching skills of pre-service elementary school teachers? 小学校英語教育学会 全国大会（大阪大会）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松永 舞 (MATSUNAGA MAI)
近畿大学・経済学部・准教授
研究者番号：30351571

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：